

救済をもたらす悪

——Flannery O'Connor 作品における暴力の効果——

大槻直子

アメリカ南部作家として知られている Flannery O'Connor の作品はカトリック的な表現が多くあると評される一方、グロテスクな表現が読者に強烈な印象を与えている。彼女の作品に登場する主人公の多くは Redemption (救済)を受け、その結果、死をむかえることとなったり、彼もしくは彼女が思い描いていた、望んでいたこととは全く異なる悲劇的結末に直面する。このような結末をむかえることを O'Connor は主人公が「Grace (恩寵)を受け入れた」(*Mystery and Manners* 115、以後 *MM*) 結果であり、この恩寵を受け入れるまでの過程を作品の礎となるものとして重要視している。本稿ではこの Grace や Redemption について、なぜ O'Connor が重要視するのか、そしてこれらを表現するために主人公はなぜ悲劇的結末をむかえなくてはいけないのかを考察していく。

Grace の重要性

O'Connor は、“I have written several stories which did not seem to me to have any grotesque characters in them at all, but which have immediately been labeled grotesque by non-Southern readers.” (*MM* 32) と述べ、南部作家の特徴を南部に住んでいない読者によって定義づけられていることに抵抗を覚え、そしてこの定義づけのために南部出身でない作家たちとは孤立した状況にあることに不満を表明している。O'Connor はそう考える一方で、作家自身の生まれ故郷について書かない作品は平坦なもので、

それはつまり、誰にでも共通している事物を扱うことを意味し、一般大衆受けしやすいが、それはその作家の故郷の *manner* (生活習慣) を表現していないと述べ、南部作家として孤立していても *manner* を表している作品は美德である (28-9) と考えている。

では南部作家として表現する *manner* とは何であろう。O'Connor の主張する *manner* とは彼女が否定しているグロテスクな表現のことをさすのではなく、Christianity のことを意味する。作家のもつキリスト教信仰が作品の *manner* となるのである。作品を書くにあたって O'Connor は次のように考えている。

I see from the standpoint of Christian orthodoxy. This means that for me the meaning of life is centered in our Redemption by Christ and what I see in the world I see in its relation to that. I don't think that this is a position that can be taken halfway or one that is particularly easy in these times to make transparent in fiction. (32)

Redemption を作品中に表現することが彼女の目的であり、南部作家の *manner* なのである。作品中の登場人物がこの Redemption を受けるということは、すなわち Grace を受けることをも意味する。作品中に Grace がなくてはいけないのは、南部作家としての *manner* を表現するために必要なのである。

Redemption と悲劇的結末

作品を悲劇にすることで、読者の心に衝撃を与えたり、カタルシスをもたらす。読者の心に訴えるには、日常に潜む思いもよらない事象によるアプローチが必要なのである。それが O'Connor の作品ではグロテスクな描写であったり、暴力という手段を持つプロットとなっている。彼女の短編 “Revelation” では主人公が病院の待合室で、他愛もない会話をしていただけなのに待合室にいた他の女性から暴力を受ける。“A View of the Woods” に登場する祖父は、最愛の孫娘をしつけるためにやむを得ず手を

あげるだけのはずが、彼女を殺めてしまう。こういった悲劇に先に述べた O'Connor が重要視している Redemption や Grace がもたらされているのかは疑問である。Redemption の意味を Oxford Dictionary of English から確認してみると、“the action of saving or being saved from sin, error, or evil” とある。罪や過ち、悪から救うこと、もしくは救われることを救済というのである。では、O'Connor の作品に登場する主人公たちは罪を犯したり、よこしまな性格を持ち、それが悔い改められて救済されるということなのか。これが成立しなければ Redemption は作品中で達成されない。そして、主人公たちが悲劇的結末をむかえることで、彼らが救済を受け、恩寵を受容したというよりもむしろ、他者による攻撃や愛する者を失う喪失感によって、達成されえないもののように思える。

ここで先の短編の主人公たちを考察し、O'Connor が創作にあたって重要視している manner や Redemption、Grace について見直していく。

“Revelation” の主人公 Turpin 夫人や “A View of the Woods” の Fortune 老人は一見、労働者階級よりは上の階層にいる人物である。こんな彼らに罪や悪が潜んでいるとするなら上流階級ゆえの傲慢なのではないだろうか。

Turpin 夫人の場合、次のような描写がある。待合室にいる他の人々を観察し、特に身なりのよくない人たちに対してかなり偏った考えを持ち (*The Complete Stories* 490-1、以後 CS)、普段からこうした偏見を持つことが夫人にとっての習慣であることが推測される。

Sometimes at night when she couldn't go to sleep, Mrs. Turpin would occupy herself with the question of who she would have chosen to be if she couldn't have been herself. If Jesus had said to her before he made her, [...]. “All right, make me a nigger then — but that don't mean a trashy one.” And he would have made her a neat clean respectable Negro woman, herself but black. (CS 491)

この空想の習慣はさらに階級づけにまで発展する。最下層は colored

people、そのまわりに white-trash、そのうえに home-owners、home and land-owners、とランクをつけている (491)。

空想するだけなら罪や悪であるとは言い切れないだろうが、同じ待合室にいる人たちとの会話のところどころに彼女の傲慢が次第に表れている。それは、Turpin 夫婦の農場で働く黒人労働者に対する会話からみとれる。“We found enough niggers to pick our cotton this year [...]. I sure am tired of buttering up niggers, but you got to love [th]em if you want [th]em to work for you” (494) と待合室の中で話をし、さらに、“they’re going to stay here [the United States] where they can go to New York and marry white folks and improve their color. That’s what they all want to do, every one of them, improve their color” (496) と偏見に満ちた発言をしている。要は話し出したら止まらない、話し好きの女性なのである。これを悪とするなら、悪の性質を考えて、彼女は innocent evil といえよう。しかし、この夫人の会話に我慢ならなくなった女性、Mary Grace が夫人に襲いかかる (499)。夫人本人にしてみれば、ただ普段どおりの会話をしただけなのに、なぜ暴力を受けなくてはいけないのかわからない。しかし、読者には暴力の理由がわかるように作品はうまく構成されている。夫人の空想の描写からそれが彼女にとっての習慣であれ、内心はかなりの偏見を持った傲慢な人間であることを読者は知っているのである。読者と同じく Mary Grace は夫人の傲慢さを見透かしていたかのような存在で、彼女は夫人を攻撃するのである。Mary Grace の「Grace」は恩寵を意味する「Grace」と異しくも同じ綴りである。夫人は Redemption を Mary Grace から暴力によって与えられたと暗示している。傲慢に気づかないから攻撃を受けたのである。これはあえて受けなくてはいけない暴力であろう。この作品での救済というのは、主人公が暴力を受けることによって自身の傲慢に気づくということではないだろうか。しかし、強烈な暴力の描写によってこの救済の表現ははっきりと表れているというよりも暗示されていると述べたほうが適切である。

“A View of the Woods”の主人公である Fortune 老人の救済を考察するのも同様に難しい。土地を所有していることで優越感を持っている点では Turpin 夫人と同じなのであるが、この老人にとって土地を所有することは、彼の家族の誰よりも力を持っていることを暗示させるために必要不可欠なステータスなのである。老いた彼が娘夫婦に邪険に扱われないようにするための唯一の自己防衛手段なのである。しかし、孫娘にとって、彼の自己防衛手段など気に留める必要もなく、彼女が従わなくてはいけないと考えている人物は、老人を脅かす存在でもある彼女の父親なのである。

老人の孫娘は、父親の折檻は甘んじて受け入れる (CS 340) が、老人がなそうとする折檻に対しては全力で抵抗した (CS 354-6)。彼女にとって父親が絶対的な存在であり、たとえ老人から愛情をそそがれても、父親が仕事をしている農地を売ろうとする老人を彼女は許せないのである。そして老人と格闘した末、不運にも命を失ってしまう (CS 355)。老人の自己防衛手段は孫娘との交流を台無しにし、その結果、不幸を招いてしまう。この作品において一体、Redemption や Grace がどのように表現されているのだろうか。

自分の保身ゆえに孫娘の命を奪ってしまったことで、老人は自分の内面に傲慢や彼自身が嫌っていた暴力性が隠れていたことを知る。大切なものを失うことによって自分の本質を知り、悪に気づくのである。これが Grace であり、彼は Redemption をむかえたととらえることができる。恩寵がもたらされる状況というのは、必ずしも幸福感とともにもたらされるものではないと作者は示しているのだ。この2つの作品を考察していくと、Redemption や Grace は evil の出現によってもたらされると言える。

このように evil が Grace をもたらすものであるとするなら、“The Lame Shall Enter First”に登場する Rufus は典型的な evil と言えよう。妻を亡くし、息子と二人で暮らす Sheppard の家に Rufus がやってくる。Sheppard は少年院でカウンセラーとして彼の世話をし、更生したら立派な人物にな

ると期待していた。そして、自分の家へ迎え入れることによって、Rufus の存在が自己中心的な息子にもいい影響をあたえ、相乗効果をもたらすと考えていたのである。しかし、この望みは彼の思うようにはならず、Rufus は再び逮捕され、息子は自殺をするというショッキングな結末を招いた。IQ の高い Rufus の知的好奇心をくすぐり、一般家庭にとけこませることで彼を更生させ、なおかつ息子に良い影響をあたえるという計画は間違っていたのである。これは Sheppard が Rufus にとって救いをもたらすイエスのような存在になろうとしていたことが思い上がりであり、罪と考えられる。Rufus は彼の好意をそのようにとらえていたのである (CS 459)。

Sheppard が息子 Norton との親子関係に悩んでいることに Rufus は気づいたので、彼は Norton に今すぐ死ねば死んだ母親に会うことができるとそそのかし (CS 462-3)、Sheppard を苦しめることをしはじめる。警察に捕まるためにわざと他人の家に侵入したり (CS 464-5)、万引きをする (CS 476)。自分のことをイエスのように思い込んでいる Sheppard に彼は悪事を働くことで、これでも許すことができるのかと試しているのである。このことから Rufus が備えている evil は先にあげた作品に登場する Turpin 夫人の innocent evil や Fortune 老人の selfish evil とは違う、計画的、慎重な intellectual evil であることがわかる。

こうした Rufus の心理的暴力によって追い詰められ、善意と違ってなしていたことが全て無駄になった Sheppard は自分の思い上がりに気づく。この時点で Sheppard は Redemption と Grace を受けたといえる。たとえその後には待っているのが、自殺による息子の不在だとしても。無神論者の父親と信心深い息子という対極にある二人が evil を象徴する Rufus によって、それぞれの Grace をむかえた結果といえる。

evil がもたらす作品の本質

このように考察していくと、O'Connor の作品には Redemption とい

うテーマのもとにストーリーが展開されているということが言える。O'Connor 自身も暴力や悪について次のように述べている。

We hear many complaints about the prevalence of violence in modern fiction, and it is always assumed that this violence is a bad thing and meant to be an end itself. With the serious writer, violence is never an end in itself. It is the extreme situation that best reveals what we are essentially, and I believe these are times when writers are more interested in what we are essentially than in the tenor of our daily lives. Violence is a force which can be used for good or evil, and among other things taken by it is the kingdom of heaven. (MM 113)

暴力は真の作家にとって善と悪の両方に用いることができると主張している。つまり、Grace をもたらすための暴力は善であり、O'Connor が作品の中で表現している暴力は Redemption をむかえるためのプロセスなのである。そして、O'Connor 自身も悪が思いもかけず Grace をもたらしていることに気づいている (MM 118)。Redemption をむかえる手段として暴力や evil が効果的なのである。

O'Connor は南部作家としての特徴をあらわすために Redemption をテーマとして作品を書き、これと正反対の意味をもたらしかねない暴力や悪が作品に Redemption を与えるための重要な役割を果たしていた。単純に、暴力が悲劇的結末をもたらしていると表面的にとらえるのではなく、暴力があらわす作品の本質を見出すことが重要なのである。O'Connor が主張するように、暴力的表現が善であったり、悪であったりと相反するとらえ方ができるのであれば、作品をそのまま表面的に読み取るか、もしくは作家の背景をふまえて読み取るのか、様々な効果をもたらす表現が含まれた作品の本質をとらえることは難しいのである。

引用文献

O'Connor, Flannery. *Mystery and Manners*. Eds. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, 1969.

——. *The Complete Stories of Flannery O'Connor*. New York: Farrar, 1971.

——. *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, 1988.

Westrap, Karl-Heinz. *Precision and Depth in Flannery O'Connor's Short Stories*. Aarhus UP, 2002.